



「1855年ディアナ号の遭難」 富士市立博物館所蔵

日ロ交流の原点・ディアナ号の歴史(1)

奈木 盛雄

19世紀中葉、ロシアのシベリア経営は最終段階に入っていました。遠くアラスカまで領有は延びその膨大なシベリア開発の経済的発展が急がれていました。船舶の寄港・薪水の補給・難船の避難・交易等が必須でした。そうした時、アメリカ大統領フィルモアは日本開国のため対日使節団を派遣することを発表しました。1851年5月のことです。アメリカは太平洋に多くの捕鯨船を出し鯨油を採っていました。鯨油は機械油として、また照明として大きな需要があったのです。アメリカはその捕鯨船の燃料・食料などの補給、難船の寄港、また清国との貿易も始めていましたので、その中継地として日本の開港要求が必至でした。

1852年5月30日ニコライ一世は、プチャーチン海軍中将を遣日使節に任命しました。これは適材でした。プチャーチンはすでに日本開国の必要性を上申していた人物でした。

ロシアは既にラックスマン、レザーノフなど対日交渉を行ってきましたが、かたくなな日本の鎖国によって成功しませんでした。しかし今回は違います。アメリカによる日本開国をロシアはそのまま見過ごすわけにはいきません。アメリカと同等の規模で交渉にあたる必要がありました。ロシアの対日交渉は、日本の開国交易と国境画定でした。これを極力平和的手段で交渉しようニコライ一世は指示しました。

1852年10月19日使節船パルラーダ号はクロンシュタット軍港を出港、日本



プチャーチン提督

に向かいました。パルラーダ号は 1832 年に進水した古いフリゲート艦(重武装快速帆船)でした。プチャーチン中将は、これより先単身イギリスに向かっていた。そしてイギリスの蒸気船を購入、艤装してボストークと名付けました。パルラーダはポーツマスに入港して修理に入りました。1853 年 1 月 18 日プチャーチンはパルラーダに乗船してポーツマスを出発日本に向かいました。ボストークが同伴しました。2 艦は日本に入港する前、小笠原に寄港して別に参加する 2 艦と共に 4 艦で編成することになっていました。

アメリカのペリーがノーフォーク港を出帆したのは 1852 年 11 月 24 日でした。パルラーダは大西洋を南下しアフリカのケープタウンを通過してインド洋に入りましたが、艦が古いのでこれから先が不安になりました。そこでプチャーチンは、シンガポールから将校を下船させて本国に向かわせました。パルラーダに代わる新鋭の艦を派遣してもらうことにしました。その指名した艦がディアナ号です。

ディアナ号は 1852 年 5 月に進水した最新鋭艦で、全長 52.75m、幅 13.56m、2,000t、大砲 52 門、3 本マスト、艦首にはローマ神話の女神ディアナ像が飾られています。パルラーダは 1853 年 8 月 7 日小笠原父島に入港しました。そこでは本国からの重大な追加訓令が伝書使によりもたらされていました。続く

(会員 富士市在住)